

杉田玄白「耄耋独語」

呆け老人の独りごと

中 崎 昌 雄

世の中が、いわゆる高齢化社会になって、かつての「死にざま」「生きざま」に加えて、新しく「老いざま」が問題になって来ている。

大学で老人学 (gerontology) が講じられ、病院に「老人科」まで開設される現在である。

杉田玄白は文化十四年（一八一七）八五歳まで生き、滝沢馬琴は嘉永元年（一八四八）八二歳まで生きた。この時代としては二人とも異例の長寿である。この二人は、また筆まめなところが共通していて、永年にわたる克明な日記を残している。

玄白「鸚齋日録」^①、馬琴のいわゆる「馬琴日記」^②がこれである。私はこの二人の「老いざま」に興味を持ち、日記などの中から関係のところを抽出して、二人の老いに対する態度の比較を試みた。これが先ごろ発表した「義歯」二つの場合―杉田玄白と滝沢馬琴^③―である。

ここで「義歯」が表題に出ているのは、発表の場がたまたま「歯界展望」という歯科の発表機関だったからであり、

内容はかならずしも「義齒」に限ったわけではない。

杉田玄白はまた自分の「老いさま」を医師の眼で冷静に観察して「耄耋独語」ほうてつどくごを書いている。「義齒二つの場合」では杉田玄白の「老いさま」の解析に、この「独語」を縦糸として用いた。そして私は、この論考の中で「独語」は、達意、平明で魅力に富んだ文章だから「原文をこのままここに複製したい誘惑に駆られる」と書いておいた。

このためか、読者の中のかなりの人から、その原文を紹介してほしいという照会があった。私の知るかぎり「独語」には現代文訳として芳賀 徹「耄耋独語―老いぼれの独りごと」4があるだけで、原文そのものが活字になったものはないようである。

これが中京大学「教養論叢」に、この「耄耋独語」の写本を活字におこしたものを、付録「原文」として発表させていただく理由である。

また「義齒二つの場合」杉田玄白(上)の部分で、短く書き改めたものを「解説」として前に付けた。この「解説」での引用は、写本の原文を適当に現代仮名遣いに直したものをを用いたが、付録「原文」での仮名遣いは写本のままにしている。

写本には句読点、改行、段落がない。しかし読みやすくするために付録「原文」では、これらを適当に施しておいた。また写本でほとんど省略してある濁点もいちいち断らずに補充した。当て字で「こじつけ」の甚だしいものについては括弧の中にその読みを示した。

この写本には明らかに写し誤りと思われるところがあり、逆に写本の中に原本の誤りを指摘したところもある。これらは「文献・注」の中に説明しておいた。

「解説」に書くように、ここで原本に使用したのは「慶応義塾大学医学情報センター」富士川文庫所蔵の写本である。

富士川游は有名な医史家である。この写本がどういう由来のもので、他にどんな異本があるのかなどという書誌的なことに関して、私はまだ「注」に書いておいた以外は調査をしていない。⁽²⁸⁾

解説

はじめに

杉田玄白『ほうてつどくし耆耄独語』は玄白らしい言葉で始まっている。

「翁は享保十八年癸みずのとうし丑九月十三日の生まれにて、今年文化十三年正月九日の節分までに齡は八十四年、その日数は二万九千九百十九日になりぬ」

文化十三年は玄白の死の前年である。玄白はよく、自分の生きた日数を書きとめている。日記『いさい鶴斎日録』文化二年正月二日（七三歳）の条にもあるし、文化六年四月喜寿の揮毫にも「生来二万七千二百十五日翁」と書いてある。よほど長寿を気にしていたのだろう。もともと玄白は齒が丈夫で六〇歳ころまではどうもなかったのだが、このころには齒が一本もない。

『きぼう耆耄独語』の文化十三年（一八一六）、玄白より三四歳下の滝沢馬琴はちょうど五〇歳である。馬琴のほうはとうと若いときから虫齒に悩まされている。

『近世物之本江戸作者部類』は蟹行散人の撰となっているが、馬琴が天保五年六八歳のときに書いたもので、そこに次のようにある。

「曲亭少壮より口痛の患いあり、文化年間、日夜著編にいとまなかりし頃は、日毎に虫齒に苦しめられざるることな

し」
文化年間は馬琴四〇〜五〇歳のときで、『椿説弓張月』を完成したのが文化三年(四〇歳)、『南総里見八犬伝』初輯五巻を刊行したのが文化十一年(四八歳)という。脂の乗り切った年である。この虫歯は年とともに、ひどくなって五七歳には歯が一本もなくなった。

『解体新書』のあと

『菴叢独語』は「呆け老人の独りごと」である。『解体新書』が出版されたのが安永三年、彼が四二歳のときであるから、この『独語』のときからすでに四二年も前のことになる。玄白が往時を懐かしんで『蘭東事始』の草稿をつくり、これを大槻玄沢に托したのが『独語』の前の年、文化十二年四月である。

『蘭東事始』には玄白が性急に翻訳を急ぐのを同社の人が笑った話がある。これに対して玄白は答えている。

「かたがたは身健かに齡は若し。翁は多病にて、歳も長けたり。往々この道大成のときには迎も逢とていがたかるべし」
そして「諸君大成の日は翁は地下の人となりて、草葉の蔭にて見侍るべし」といったので、当時まだ二二歳だった桂川甫周など若手に笑われて「草葉の蔭」と渾名をつけられている。

その甫周も七年前に五九歳で死んだ。「解体新書」翻訳の語学上の指導者だった前野良沢の十二回忌のあったのが、『独語』の前年である。まして「非常の人」平賀源内が牢死して三七年、同じ小浜藩の医師で同僚だった中川淳庵が死んでからでも三〇年も経っている。

玄白は多病と自分では言っているが、平静な心をもった聡明な人で、無理をせず、医師でもあるから人並以上に健康に気を使っている。彼の日記をみても勤勉に往診をしていて、健康な活動家であるという印象をうける。

趣味も多く、学者肌の良沢と違って交際が広い。句会に出るし芝居もみる。「源氏会」にまで出席するという忙しさである。柴野栗山はこの点を強調している。「医員杉田翼は博交の人なり」

彼は外科医であるが、梅毒を専門にしていた。玄白七〇歳にものした『形影夜話』(享和二年)に次のようにある。

「梅毒ほど世に多く、しかも難治にして人の苦悩するものはなし」

そこで、なんでも屋になっても仕方がないので、「かねがね志す梅毒の方論ばかりは読み尽さんと志を決し」た。この方針のもとに、梅毒の方論(処方)をいろいろ集めてみたが「百発百中なる方」もなかった。しかし兎角するうちに「虚名を得て」病客は日に日に多くなり、「毎歳千人余りも療治するうちに、七八百は梅毒家なり」という状態になったという。

そのうえ玄白はまめに往診に応じたから、蘭学のボスという名声を背景にして流行医として、もてはやされるようになった。収入も莫大なものである。

もともとあまり強くない蘭学のほうは、弟子の大槻玄沢に任せた。『蘭東事始』にいうように、玄沢は玄白と違った風で「一体豪気は薄けれども、すべて浮きたることを好まず、和蘭の窮理学には生れ得たる才ある人」であるから、その学塾芝蘭堂は江戸蘭学の中心となっている。

玄沢の『蘭学階梯』は、玄白五六歳(天明八年)のときに出版されて、蘭学入門の必携の書という評判を得ている。

この天明八年に玄白は妻登恵を失った。

玄白の八〇歳までの長い生涯のなかで、身内の不幸といえはこの妻の死と、生まれたときから病弱であった長男が十一歳で死んだことだけである。ところが文化十一年、玄白八二歳『独語』の二年前に新しい不幸があった。長女扇と養子伯元との間に生まれた玄白の嫡孫恭卿が死んだ。それも二一歳という若さである。これは玄白にも堪えたらし

い。

「去る年の秋までは逆事さかじというのは見聞かざる身なりしが、満つれば欠くるの習い、思わぬ外に嫡孫の男一人先立さかったり」(『独語』)

鶴齋「九幸老人」

もともと玄白は聡明な活動家で、それにふさわしく楽天的である。「九幸」とか「九幸老人」などという号の由来がそれを物語っている。

この号を彼は古稀(七〇歳)のころから使用している。この年、享和二年玄白七〇歳、九月には良沢(八〇歳)と合同賀宴をもつはずであった。

『独語』は「九幸」の由来を次のように説明している。

「われを知るものは、幸に幸を重ねる人なりと、逢う人ごとに羨めること多かりしにより、自らその数をかぞえて九幸と号せり」

その「九つの幸」とは、「泰平に生まれ、都下に長じ、貴賤と交わり、長寿を保ち、食禄を食み、いまだ全く貧ならず、四海に名あり、子孫多く、老いて益ます壮なり」というのである。

ところがこの古稀の年、賀宴に先立つ三月に玄白は生れて初めて大病をする。そのころはやった「薩摩風」にかかったのである。「しゃっくり」と「吐気」に苦しみ、一時は人事不省にまでなった。日記は三月十三日で途切れている。しかし四月になって持ちなおし、四月五日には床上げをした。そして九月に無事に合同賀宴をすませると、十一月に『形影夜話』を仕上げている。

この年には、小浜藩酒井家の中屋敷で世子の正妻と妾の出産が続いてあって、玄白は宿直を仰せつかった。

宿直の夜、ひげを抜こうと思って鏡を借り、これを柱に立て架けて覗きこんでみた。その鏡に映った自分の姿との十三の問答の形式にして、玄白の医師としての経験、抱負を物語ったのが、この『形影夜話』である。

鏡に映った影は「かげ法師といえる法師」で、「おことと我は二り子なり」という。この「かげ法師」のなかに玄白は自分の老残の姿を卒直に描写している。

「顔のさましわみ多く、老のなみだ目をうるおし、齒も所どころ残りて、さもみにくげに神さびたる翁のたち居たるあり」

このあと文化二年（七二歳）には十一代將軍家齊に拝謁を仰せつかり、文化四年には家督を伯元に譲った。楽隠居の身である。しかし世間はそう平和というわけにはゆかない。

次の年、文化五年に英艦が長崎港を襲撃するという騒動があった。フェートン号事件である。フランス革命のあとの反動でナポレオンは歐洲大陸を席捲し、その余波はこの極東の離れ島にも寄せてきた。世界の脈動は北方にも迫っている。ロシアの東方経営の触手が蝦夷地にも及んで来たのである。

鋭敏な時代感覚をもち、幕閣にも情報源のあった玄白は、このころ警世の書『野叟独語』(田舎爺のひとり言)を書いている。

「ある夜、燈の下に閑座し、わが影法師に向い、自ら問を起し、先生いわんとする事あらば、その知る所を答え給えりといえり」

こうした影法師との六問六答の問答形式で、世界の情勢の説明から国防に及び、幕政改革にまで触れている。もちろん、出版されることはなかった。

「いまだ世にあるの絶筆なり」

玄白の政治に対する関心は、なにもこの時がはじめてではない。

これも出版されることはなかったが、田沼意次が失脚し老中松平定信の「寛政の改革」の始まったころ、幕政批判の『後見草』⁽¹⁾を書いていく。天明七年、玄白五五歳のことであった。

玄白は明快な論旨を、平明な文章で表現できる、書くことの好きな「筆の立つ人」だったのである。

文化六年(一八〇九)玄白は喜寿(七七歳)を迎える。この年、養子の伯元が幕府から白銀二〇枚を褒美に貰った。地理の蘭書二冊を献上したからである。伯元はこの金を玄白の著『形影夜話』の出版費用に当てようと考えた。

出版は次の年、文化七年の十一月になり、その巻頭には石川大浪筆「鷓齋杉田先生肖像」が掲げられている。大浪は江戸洋風画の大家である。

楳田の梓のなかの半身像で、その文章から想像されるとおりの平静で澄明な容貌が描かれている。『形影夜話』の鏡に映った自画像「かげ法師」の「さもみにくげな翁」にはほど遠い。この玄白像は明治二年に福沢諭吉らの力ではじめて刊行されたときの『蘭学事始』にも載せられることになった。

このころ、世界でオランダ国旗の立っているところは、商館長ゾーフが守っている長崎出島だけである。ナポレオン戦争のためオランダ王国は消滅したからで、当然この数年オランダ船は欠航している。国後島で露艦長ゴローニンが捕えられたのが文化八年(一八一二)六月である。

この閏三月、玄白(七九歳)は十年ぶりの大病にかかっている。しかしなんとか回復し、見舞に感謝して祝餅を配った。そのときの述懐の詩の一部は次のように読み下せる。

「何事ぞ頑翁病卒然として、将に浮世を辞して黄泉に向わんとす」

元氣な玄白にもそろそろ「ガタ」がきた様子が見える。それに追い打ちを掛けたのが、前に述べた嫡孫恭卿の死であった。玄白八二歳の秋のことで、これがたたったのか、次の年文化十二年の初春早々彼は二度目の大患を経験する。「血肉恩愛にひかされ意悲しみの老が身にこたえしにや明くる春は心常ならず、いたつきの事、出で来て身体熱気はげしく病の床に打ち臥しぬ」

この病氣は前二回のとく同じく「しゃっくり」を伴い、小便が閉塞したのであるが、二〇日ばかり床にいたただけで回復した。まだまだ元氣である。四月には昨年からの稿を続けている回顧録『蘭東事始』の草稿を大槻玄沢に託していることからそれがわかる。

玄沢（大槻茂質^{しげかた}）による『事始』の序文は玄白が前の年、文化十一年から稿を続けていたと書いている。

「それは文化十一年甲戌の年なり。然るにその草稿半ばにも満たず、ある月の夕づく頃いささかの風の心ちあらせ給いしより軽からぬいたづきの事あり」

『事始』がその絶筆になるだろうことは玄白も予想している。『事始』の最後には次の言葉がある。

「翁次第に老い疲れぬれば、この後かかる長事記すべしとも覚えぬ。いまだ世に在るの絶筆なりと知りて書きつけしなり」

玄白『耄耋独語』

そして次の年が『耄耋独語』の年である。文化十三年（一八一六）玄白は八四歳になっている。『独語』は玄白として風変わりな作品であるが、いかにも彼らしい風格がある。

「恍惚の人」になりかかっている老人が、自分の肉体と精神の老耄を、これほど卒直に描写した文章は、少なくとも

古典には例がないのではなからうか。医師らしい冷静な眼で観察し、これを聡明な人にふさわしい醒めた澄明な心境で書き留めている。

わたくしが引用しているのは「慶応義塾大学医学情報センター」富士川文庫所蔵の写本によっており、これを適当に現代仮名遣いに直しているのである。「独語」は写本で十二丁であるから、文庫本にすれば二〇ページ程度のものにならうか。平明な文章であるから別に現代文に直さなくても、活字本にすれば三〇分もあれば読了できる長さである。玄白は、わが身に次第に死の迫ってきているのを実感している。

「この分にては天より与え給える油皿あかりだけは燈あかりの光保つべきにや。それさえ次第に減じ、その光月ごと夜ごとに薄暗くなり行けば終つひに消失すべきなり。これは人生の定業なればいい立つるもうるさき業なり」

寿命というのは天が自分に与えてくれるものである。世のなかの人はそのことを弁えず、みだりに長寿を求めんと心を勞するのは無益である。わたくしのように老人になってしまえば、すべてが自分の意のようにならないものだ。このことを知らず、いたずらに長命を羨み、それを願う人の参考までに次の文章を草するのである。

このような序文で始まる『独語』は、全文をそのままここに複製したい誘惑にかられるほど、達意で魅力的な文章なのである。少なくとも、玄白の頭脳は彼がいうように「ボケ」てはいない。

老化の叙述は眼から始まる。まず眼が駄目になる。

「日暮れば眼鏡にても燈下にては書を読む事、物書く事もならず。昼もつねに眼花ちりてうるさし」
 こういう有様では、生きていて死んでいるのと同じだ。

次は鼻だが、鼻水がたれて汚い。耳は齡のわりにはよいほうだろう。だが、「上逆」(のぼせ)の強い朝などは耳鳴りがしてうるさく、また後ろからの物音がはっきりしない。齒は全部抜けてしまった。

『耄耋独語』の義齒

『独語』のなかの齒のところはかなり長く、全体の五分の一を占めている。

人ははじめて生まれると、天より乳汁を与えられる。生長して有形のものが食べられるようになると、自然に齒が出てくる。

さらに堅いものを食べるようになると齒が抜けかわる。このころは誰もこれを当り前のように思って、平気で堅いものを食べる。しかし初老ともなると次第に悩みが出てくる。ただ玄白はこれと違って六〇歳（耳順）ごろまではどうもなかった。

「耳順の頃にいたり初めて齒には数かずの悩み出て来たりしに、それより後、今年是一本、一本と数え、ついには去月は一本、今月は二本と欠け始めて、今ははや一本も残りなく落ち尽したり」

しかし、いままでに旨い物を食い尽して八〇歳になったので、別に食いたい物とてない。だからこのごろは口に合うものだけを食べている。だが、なくなってみると、齒のあるときは思いもなかった「食いこぼれ」がひどくなり見苦しい。

それでも一本、二本残っていたころは、熱い物を食べるとき、ここで息をかけて冷していたらしい。それで気がつかなかったのだが、残らずなくなってみると、それができず、直接に唇にくわえてしまうから火傷をしない日はない。麺類も柔らかくて食べやすいようだが、齒がないと直接に飲みこまねばならず、食べにくいものになってしまった。魚も骨を舌で探って食べる物なのに、その相手の齒がないものだから、どうにも始末がつかない。

『独語』のこのような説明を聞くと、全くそのとおりだろうという気にさせられる。

玄白の記述の巧みさだろう。

さていよいよ義歯をつくることになる。

「すでに入歯を作りて用いし事ありしに、物喰うため物言いのためには、少し良きようにも覚えたれども、下地を黄楊の木にて作り、余程大いなる物ゆえ、いかようの上手に作られても、馴れぬうちはいとうるさし。またこれを忍びて用ゆるも、もと自然の物ならねば、養のためにはならぬようなり」
もともと自然のものではないから、身体のために悪いだろうというのである。

「また良く馴れしと思えば木目だちて舌にさわり、常に苔ある舌の心地にて物の風味よろしからず。ことに人びとのおれおのれが口中自然においあるものなるに、かかるものを新たに作り添うるの常に違うところ出で来るゆえにや、快からず覚ゆるなり」

黄楊の義歯の表面が「ケバ」立って気持が悪く、口臭もそれにつれて強くなり不愉快になってくる。
これだけではない。

「老いては誰も食事のたびにむせやすきものなる上に、これありてはむせることますます甚だしきようなり。兎にも角にも不自由いわんかたなし。さて物語りするに、その五音のなか歯音欠くるゆえ、その接語の不便もつとも甚だしき事のみなり」

歯音というのは「サ行」、「ザ行」のような摩擦音のことだろう。このように義歯を入れると、むせやすく発音しにくいことに不平を述べて、歯における「老い」の不都合な点の指摘を終わっている。

玄白は医師の立場から義歯のことをよく思っていないようである。

これが滝沢馬琴の義歯に対する態度との差である。馬琴は若いときから虫歯に悩まされているが、おそらく玄白は虫歯の疼痛のつらさを知ることがなかったであろう。

「百いても同じ浮世に同じ花」

九穴のうち顔にある七つの穴の不便なことはこんなものだが、下の二つの穴となると、もっと具合が悪くなる。大便、小便が大変である。

眼や歯の不便なことでもそうだが、この辺の描写は一層に遠慮がない。医師なのだから当然だが、ジメジメした話題をまるで診断書のように平静に書いているものだから、本当にそうだろうなと思わされてしまう。

なまじ軽妙などという策を弄さないところが気持がよい。

大便、小便の次には手足の働きの不自由なことの説明があつて、最後に頭脳の「老い」に移る。

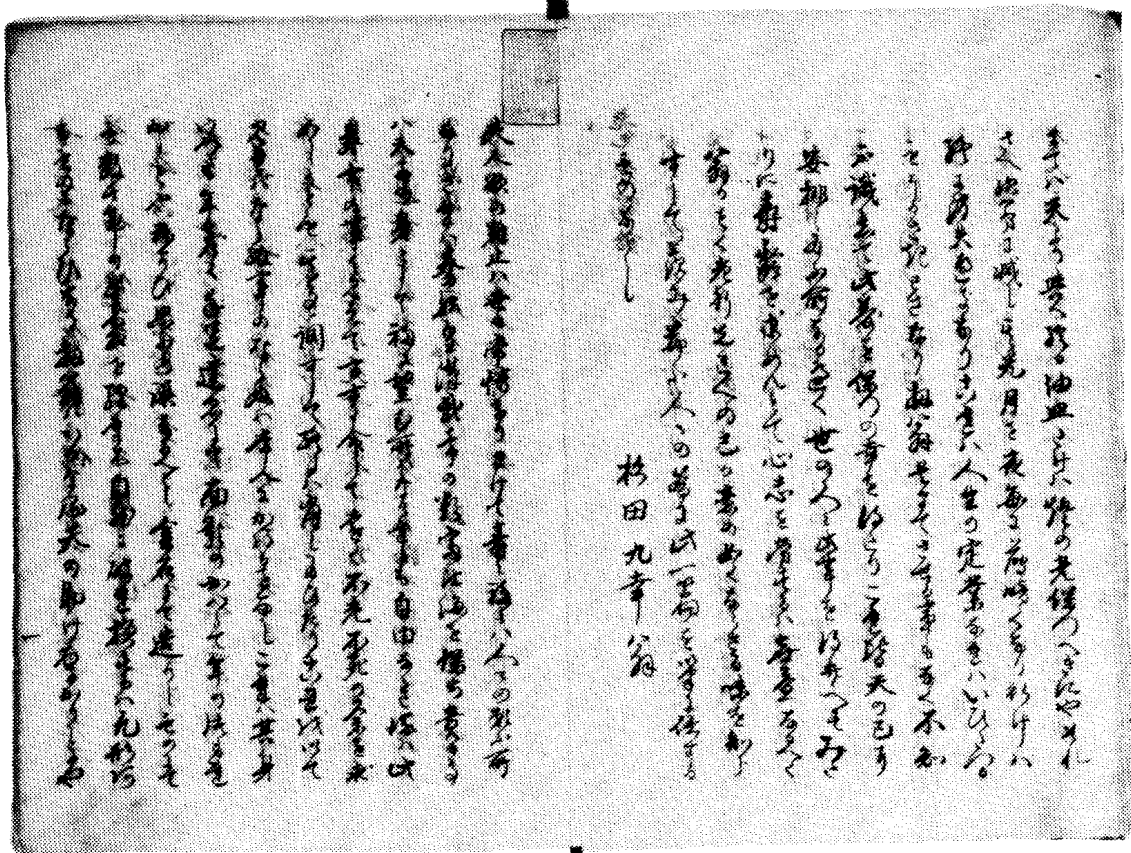
筋肉などは有形のものだから衰弱があつて当り前だが、精神は無形のものゆえ、そんなことはないと言つてゐる。自分も老耄は恥で、そうならないように気を付けていたが駄目であつた。人の名前を忘れる、物を置いたところを忘れる。はては現に手にもっている物を探し回る始末である。

こうなつては他人から長命だと羨まれても、それはこんなことを知らないからである。六〇歳には六〇歳の、七〇歳になつたら七〇歳になつての、つらさと衰えがあると知るべきである。

これからの残りの章で、玄白は自分が老境に達して得た人生観を開陳する。

自分は幸によい家庭に恵まれ、その点では不自由はない。しかし友達はみな死んでしまつて、昔を語る人としてなく、物淋しく面白いことはなにもない。自分の若いころ、日本橋四丁目の家主に宇右衛門という人がいて九〇歳まで生きていたが、「寿命にあきはて、死ぬべき薬もとめたしとて、人びとに所望せしよし」である。

「この事、狂人の言の如くなれども、氣血あくまで衰え、万事不自由なる上にはさもあるべし。さして驚くほどの事



慶応義塾大学医学情報センター富士川文庫所蔵
 杉田玄白「耄耋独語」
 (慶応義塾大学医学情報センターの許可を得て転載)

にはあらずと思ふなり」

油煙斎貞柳老人に次の狂歌がある。

「百いても同じ浮世に同じ花、月は真丸、雪は真
 白」

自分も八〇歳まで生きてきたが、このとおりである。強いて長命を願うのは無益のことなのである。そして『独語』は次のように締めくくられる。

「あまりに命おしがる人びとは、この苦しみを知らざるのひがごとなり。これを知らざる人びとの為にとて、翁がこの身のある所を記し留めて、八十にあまりし老が身にて書置きはべるなり」

柴野栗山はかつて言った「玄白は真の奇才なり」。杉田九幸翁『耄耋独語』はこの奇才の最後の傑作である。

次の年、文化十四年(一八一七)四月十七日、玄白はその眩しいほどに充実した「九幸」の人生を閉じる。八五歳であった。

「この学今時の如く盛んになり、かく開くべしとは曾て思いよらざりしなり」(『蘭東事始』)
彼の生涯などを英語で「a well-spent life」というのであろう。

付録「耄耋独語」原文

翁は享保十八年癸丑九月十三日の生れにて、今年文化十三年正月九日の節分までに齡は八十四年、其日数は二万九千九百十九日になりぬ。

生得健全なるにあらず。積聚などいへる宿疾もある事は常人に異ならず、時々発動する事もありし。差(さ)して養生に心を用ひしといふ事もなく、年若き時は少しは酒も用ひしが、天性好ざる所ありしにや中年過よりは絶て吞ず。常にこれぞといへる格別の得食もなし。唯其時の菜物一色か二色あれば事足りにと覚へ過せり。近来の常食は大かた女子扶持壺人分には少し不足なるべし。

此分にては天より与へ給る油皿だけは燈の光保つべきにや。それさへ次第に減じ、其(の)光月ごと夜毎に薄暗くなり行けば終に消失(る)べきなり。これは人生の定業なれば、いひたつるもうるさきわざなり。

扱翁是までさせる事もなく不知不識(しらずしらず)して此寿を保つの幸を得たり。これ皆天の己に安排し玉ふ(給う)所なるべく、世の人々此事を得弁へず、みだりに寿齡を求めんとて心志(こころざし)を勞するは無益なるべく、翁がごとく老行先きくの己が意の如くならざる味を知らずして、羨み希ふ人々の為に此一篇を筆に任するものならし。

夫(れ)人欲の難止(止み難き)は世の常情なり。わけて寿と福とは人々の願ふ所なり。されば秦始皇、漢武帝の彩富江海を保ち、貴き事は天子の身として福に望む所はなけれども、自由ならざるは此寿命の事と見えて、方士に命じて遠く不老不死の薬を求めしかども、其事調(ととのわ)ずして終には崩じ玉ひ(給い)たり。

これをもつて見れば、ならぬ事のならぬは常人にかはることなし。これは其身いつも年若く、手足達者にて面影のかはらで、年のつもれかしとや、ねがひ思ふの誤なるべし。

金石にて造りしものにも、数十年の星霜を経れば自然に破れ損ずるは、凡(およそ)形あるものならひなり。

扨翁はいかなる天の助け厚かりしにや、幸に生れて八十に余る齡を保ち、けふ(今日)までもさせる老苦を覚ざるが如し。但十年も前にくらぶれば、違へる事なきにあらず。これといふ不足を覚えざるようなれども、次第に起居などは昔とは大に差(たが)へり。近き程まで、道も二三里ばかりは歩(か)ちながら可なりに行戻りなりたり。

故に我を知るものは、幸に幸を重る人なりと、逢ふ人ごとに羨めること多かりしにより、自ら其(の)数を算へて九幸と号せり。打続て去る年の秋までは、逆事といふは見聞ざる身也(なり)しが、滿れば欠るの習ひ、思はぬ外に嫡孫の男子一人先立たり。

いともく残り多くはあれども、又思ひかへせば、老少不定は世のありさま、我一人の事にもあらず。高貴の位にある御方にても、聖賢にても逃れ給ぬは此哀傷なりとは、思あきらめざるにあらずかしと、なまじひに長命せしの一と思はる。

扨其後も飲食動作さして変れる事なきやうなりしが、血肉恩愛にひかさされ意(こころ)悲みの老が身にこたへしに

や、明る春は心地常ならず、いたつきの事出来て、身体熱氣はげしく病いの床に打臥しぬ。

こは、いにし年も一兩度まで病み煩ひし吃逆と小便閉との病、一時に発し、朝(あし)た夕べを待べからざる老々(おいおい)あやしきやうになりしかど、孫子等打集り兎や角介抱して薬餌を尽したり。未^⑮尽(いまだ尽きざる)の命にや、又幸に廿日余にして故(もと)に復したり。夫より後も大かたは過越せし年月に変わりし事なかりしやうなりしが、俄に動作衰へ、これまではさして苦勞とも思はざりし一二里の道^⑯にも、次第^⑰にせつなに覚へ、心に急ぎ行く時は身のうち汗ばみ、扱もつらしと覚ゆるやうになりたり。

よく顧み思へば、其春に秋をくらぶれば其衰弱は月々積り行^⑱(く)事身に知るるよふになりたれば、自から心細くなりぬ。これは外(の)人の目に見えねども、老の慨きは此事なり。

一・つらく、かく成行(く)ゆえんを考るに、右にいへるの衰弱のみならず、先第一には物を視るに、初(め)は目鏡なしとも其物分れぬにはあらざりしに、近き程は両眼常にうちかすみ、次第に深き霞其中に立ならぶやうに覚へ、十間も隔りし所の人の面色はたしかならず。

其身なりそぶりは誰なりと思へど、たしかにそれと分らず。夜は我行く向より来る一はりの提灯細く長く五つ六つに見え、尤(もっと)近よれば其形よりは細く見えしなり。

まして、あかしともし行く身も路の高下不慥(ふたしか)なり。扱日暮れば、眼鏡にても燈下にては書を読(む)事も物書(く)事もならず。昼も常に眼花ちりていとうるさし。かくては有(る)も無(き)がごとし。

鼻はかはる事なきやうなれども、寒きあした夕には水涕したたりてうるさく、又落しては物汚さんかとの心支(こころづかえ)なきにもあらず。凡て香臭をきく事も若き時にくらぶれば薄きやうに覚ゆ。

耳は年に比ぶればちかきやうなれ共(ども)、若き時とはちがひて次第^⑳にうとくとなりて、物音たしかならず。殊

に上逆つよき朝などは鳴てうるさく、常々前より来る物の音は聞ゆれども、後より来る物の音はうとくし。夫が為に誤りて怪我にてもせんやと思へば心支(づかえ)なり。

又口は命を繋ぐの元にして尤(もつとも)重き所なり。されば人初(め)て生るれば、天より乳汁をあたへて直に吸はせ、此乳哺の養ひによりて生長し、扱生育に随ひ有形の物を食ふべき程なれば、自然に齒といふものを生ず。これも剛く堅きものをも喰ふやうになれば、齡¹⁸(はがわ)りといふ事ありて、別に堅実なる齒牙を抜き換へて揃ひ給へり。

其頃に至りし程は、人ごとに朝夕何の心もつかず、いつまでもかくあるもののやうに思ひて、縦¹⁹(ほしいまま)に堅剛の物を食ふなり。然るに誰しも初老の頃になれば、少しづつのなやみ出来るもの也。

扱翁はこれと反し幸に耳順の頃に至り、初(め)て齒にはかづかづのなやみ出来たりしに、夫より後、今年は壺本くとかぞへ、遂には去月は壺本、今月は二本とかけ始て、今ははや一本も残なく落尽したり。これによりて硬き物としては、少しのものも喰ふ事ならぬやうになりぬ。

されど是まで瑞膳佳肴より名菜美味をも喰尽し、八十に余れる齡を経たれば、これといふ望の物もなし。但常時三度の食、口中にかなふもの斗(ばかり)食すれども、其度毎に如何やう心をつけても、齒といふ垣のなくなりたれば、時々喰ひこぼれてむさし。

未だ一、二本残りもありしまでは、熱き物を喰ふ度には、思はず知らず息吹かけてさます事ありしかと見え、其頃まではさして心付ざりしが、不残(のこらず)落て後は、やはらかき物も、一寸(ちよつと)唇にてくはへ食ふ事故(ゆえ)、其熱き物なれば其熱きにたへず。食事の度毎に火傷²⁰せぬ日はなきやうなり。

麵類などはやはらかにして、食し易きはづなれ共(ども)、これもちよと齒にくはえ吞込ざればならぬものなり。さ

るによりてこれも心に叶ず、喰ふに不自由なれば強(しい)て望(のぞま)ず。

況(いわん)や魚肴は、其骨を舌にて探り食はねばならぬものなるに、其相手となる齒なければ、すべきやうなく、若(もし)これを貪(むさぼ)らば、骨咬の患を起さんと思へば、くはざるがましかと明ら(諦)むる事多し。

すでに入齒を作りて用ひし事ありしに、物喰ふため物いひの為には、少しよき様にも覚へたれども、下地を黄楊の木にて作り、余程大成(大きな)物故、如何様の上手に作られても、馴れぬ中はいとうるさし。又これをしのびて用るも、もと自然の物ならねば、養の為にはならぬやうなり。

又よく馴しと思へば木目だちて舌にさはり、常に苔ある舌の心地にて物の風味よろしからず。殊に人々己れくが口中自然にほひ有ものなるに、かかるものを新に作り添ふるの、常にたがふ所出来る故にや、快(こころよか)らず覚ゆるなり。

老ては誰も食事のたびにむせやすきものなる上に、これありてはむせることますます21甚しき様なり。兎にも角にも不自由いはんかたなし。

扱て物語するに其五音の中、齒音欠くる故、其接語の不便尤も甚しき事のみなり。

一・上の七竅ばかりも如形(かのごとく)なるに、下二竅のうるさくつらき事は挙て数へがたく、先づ後門は日々飲食の糟粕を泄す第一の要所なれば、自由になくは叶ぬ所なるに、老者のならひ多くは秘結がちにて、廁に居ること長く、寒風の時などは其苦みいはんかたなし。

又それにつけては、便毎に脱肛し急に収りかね、又直には坐にも就きがたく、色々手当し湯にてむし、あたため漸くにしてとり納めて後、始て我身の様に覚ゆる事なり。

又平常にても放屁もれ易く、何かにつけて気合あしき事人の知らざる苦み也。但大便は日毎に壺両度にて事済なれ

ば、これを忍びて忍ばれど、小水は左にあらず。老の身は年毎に頻数になるもの故、夜もひるも数しげく、殊に冬は西北の風立、肌寒き日は通じて後も又忽に聚るやうに余瀝たへず、清水の滴るやうの心地して意安からず。

其不浄不潔なる事何にたとへん心持もあらず。わけて貴人の座に列る時は、いかなる尾籠仕出さんかと心中安からず。是等人の知らざる苦みなり。

さある心地の時ありて、いそぎ便所に至り便せんとすれば、陰器縮りて自由ならず、思はぬ方に飛散てつらし。家において竹の筒など用ひて使すれども、それもなき所にては前かたに心を配り並ぬるなど、事々扱(すべて)に如此なる事なれば老のつらき事数限りもなし。

一・又手足はもとより意の如くならず。手にていはば、ここは如何なる魔神の乗り移り玉ひしや、先(まず)物書んと思ふとき筆を把るに、これより彼所に引んと心に念じたる筆顔思はぬ方に向ひ、又何々といふ文字書んと思ひたるに其文字意にたがい、あらぬ字をかく事度々なり。

又事繁く心中いそがしき折は、分(わけ)て甚しきやうなり。そのみならず一向に忘却して、紙に向ひて当惑する事度々あり。

かかる事は我ながら怪しく思ひ侍るなり。

又日によりて、今まで何ともなかりし筋骨俄に痛出、転筋して不自由になる事もあり。其中にも膝頭、足跗などは度々に覚ゆ。

これを物にたとへていはば、革にて結付し蝶つがひのしげくあけたてせし故、延過たるが如くと同じやうなるものなるべく、如何にも筋の長くたるみし様也。かくなりたる事故、仮初(かりそめ)の事にも跌き倒れんかと思へば、一寸の起居に油断ならず。殊に腰はわけても衰弱甚し。これ腰骨は一身を保つ要所なれば、若き時より格別に勞せし

所故にやと思はれ侍るなり。

夫故、蜂か蟋蟀のやうに縮(ちぢま)りしかと思はるる心持にて、立居に付ても、ともすれば倒るべしやと一入(ひとしお)に苦し。

元より貴人の前、親しき友の前にも、意を用ひざれば慥ならざるやうなり。心に前を踏んと思へば、足は後に残り、後に止んと思へば前へ出(いず)。我身ながら自由ならず。しかある故に、起居歩行にひよろつく事度々あり。又我ながら怪しきは、さして歩行いそぐとはなくして、意にもあらぬに、いそがれ、踏止んとすれば弥(いよいよ)いそぐやうになりて止りかぬる事もあり。

これは暖和にて上逆する日²⁴などにある事也。暫(しばし)腰にても打懸けて、休らひ行かば何の障もなし。さなければ直に倒るるやうなり。此余も意をつけてためし見なば、老のくるしさ余多(あまた)あるべし。

一、扱筋骨は有形物故、日々衰弱し行(く)は勿論にて、是は無是非事(ぜひなきこと)ながら、精神は形なきものなれば、左はなき筈なりと古人もいへるとなり。

さあれば、人たる者の老耄は其人の恥と思ひ、我はせまじと兼てよりたしなみ侍れど、夫も叶ぬ事にや、近き頃は同じ咄を幾度もして人に笑れ、親しき友どちの名、朝夕に仕(つかえ)の者の名も呼違(たがえ)るやうになりたり。

又調度の類、これ忘れてはと仕廻(しまい)置て、其所を忘るる事度々なり。甚しきは、手に持し物を忘れて尋る事有(あり)。それが中に、用にも立(た)ぬ古き事をば覚へ居て、忘れざる事もあり。古に所謂老人八変に、旧きを記して新なるを記せじといひしは、我身の上を説(とき)しものぞと思はる。

翁すでに如形(かくのごとく)不自在なる身となりしを、他より無病なり達者なり、瑞寿長命なりと羨るるは、此苦しみを知らざる人の外目より視し所なり。六十は六十、七十は七十程の衰あり。此故に身のつらさは、其年ほどにあ

るものと知(る)べき事なり。

一、翁壯年より親かりし友達は皆泉下の人となり、生残りたるは、たへてなくなりたれば、今様の事など語り合ふ友とてはなく、何に付ても物淋しく面白き事はなし。

旧友の鷲齋老人の「何事も余所(よそ)になされて、いにしへをかたるをだにも、きく人のなき」とむかしの人読置ける歌を打吟じて、感じ読れしを思ひ出すまでなり。其人も又地下の人とはなりぬ。

初(め)にもいへる如く、翁はいかなる天助を得て生れし身にや、齡八十に余り、幸に幸を身に重ね、天恩の厚きに朝夕の事不足なく、行歩不叶(かなわず)なれ共(ども)、行度(ゆきたし)と思ふ所へは駕にて行き、不孝不悌の子を持(た)ざれば、齒はなくても、口にあふやうに三時も食も作り与ふれば、口腹にかなひて不足と思ふ事なし。

夜は寒からぬやうにとて、水鳥のぬく毛ばかりを入たる夜着布団を作りていたはるゆへ、それに包まればいささか寒しとも思はず。ただ暁がたとなれば、肌寒きやうに覚ゆ。

これは老が身の衰、自然に気血のめぐり不足し行(ゆく)ゆへにや。されど目覚て寝返などすれば、忽ち宵に寝し時の如く暖気復する事なり。これは養の足ざるにあらず。積り重ねし高齢に衰弱せし所なるべし。

又食事も高年の身、大食はならず。宵に程よく食しても朝の食事の待るるやうなり。万事形(かく)の如き手当残る所なきなれども、寢覚の寒き故にや手足の働(き)不自由なる様に覚ゆ。

これは若き時より、日々入湯せしのくせなるべしとて、毎朝居風呂をわかしくる故、それに入て快よく温り、湯あがりして後は身の働も自由のやうなり。又入湯のみにては、急に温気加はらぬ日あり。其時は温湯一二盃も飲、内よりもこれを助くるなり。かくせざれば十分にはなき様なり。

扱気血の循環自然ばかりにては事足らじと思へば、毎夜按摩の替者招き、日暮るる頃より臥床に入り、按擦なさし

めて、其運動を助け眠付を度として止る事は常々なり。

如形（かくのごとく）子供等の心をくばり、かしづき仕る事故、今日まで長命して無事にある事と思はる。

人に貴賤上下の差別はあれども、養に何一つ不足はなかるべし。元より医師の身なれば、針灸湯液の類は意を用ゆるなり。されども春さり秋来り、去年より今年と衰ひ行（く）事は是非なき事なり。

それにつき、くだくしくいひ立（たて）じ。数々の老の苦しき其身にあらざれば知られざる所なり。そをおもひ彼を思へば長命は詮なきものなり。

此身神仙にあらざれば、片時も無心不慾にしては居られず故、上にて雷鳴すれば落（おつる）ことかまはぬ心にはなられず。されば見るにつけ、聞（く）につけても、木偶人の如くにもならず。無益なる長命なり。

油煙斎貞柳老人の「百あても同じ浮世に同じ花、月は真丸、雪は真白³⁰」と狂歌せしは、げにさる事ぞかし。

我八十年ながらひ見しに、これにいつかたがふ事なし。しかれば死（ぬ）かたこそ、まし²⁶かとも思はるる事もあり。

一、翁若かりし時、日本橋通四丁目に家主宇右衛門といひしものありたり。此男寛文年中の生にて、長命して齡九十年に余りて、時の人仇名して孔子宇右衛門と呼しものなり。

これ其頃までは、少し常人にかはりし所ある者は、あだ名せし事なりしが、此男よく文字の音に通ぜしとて、孔子といへる名を得たる由なり。

扱此男身²⁷にして、齡長（なが）かりければ、寿命にあきはて、死（ぬ）べき薬求（め）たしとて、人々に所望せしよし慥（たしか）に聞し事あり。

此事狂人の言の如くなれども、氣血あくまで衰へ、万事不自由なる上にはさもあるべし。さして驚く程の事にはあらじと思ふなり。

彼(の)貞柳が歌の如くなれば、強て長命を願ふは無益のことなり。秦始皇武は扱置て、あまりに命をしがる人々は、此苦しみを知らざるのひがごとなり。

これを知らざる人々の為にとて、翁が此身にある所を記し留めて、八十にあまりし老が身にて(書)置待るなり。

文献・注

- (1) 杉田玄白著「杉田玄白日記」(蘭学資料叢書、第六卷)、青史社、一九八一年。
- (2) 暉峻康隆ら校訂「馬琴日記」中央公論社、昭和四八年。
- (3) 「菌界展望」第六六卷(二〇、一二月号)昭和六〇年、八六七、一一一三頁。
- (4) 芳賀徹編「杉田玄白、平賀源内、司馬江漢」(日本の名著、第二二卷)中央公論社、昭和五九年。
- (5) 片桐一男「杉田玄白」(人物叢書、第一五八卷)吉川弘文館、昭和四六年、三五六頁。
- (6) 麻生磯次「滝沢馬琴」(人物叢書、第三七卷)吉川弘文館、昭和四九年。
- (7) 松村明校注「蘭東事始」(日本古典文学大系、第九五卷)岩波書店、昭和三九年。
- (8) 佐藤昌介校注「形影夜話」、洋学(上)(日本思想大系、第六四卷)岩波書店、一九七六年。
- (9) 松村明校注「蘭学階梯」、洋学(上)(日本思想大系、第六四卷)岩波書店、一九七六年。
- (10) 佐藤昌介校注「野叟独語」、洋学(上)(日本思想大系、第六四卷)岩波書店、一九七六年。
- (11) 「後見草」燕石十種 第一卷、国書刊行会、明治四〇年。
- (12) 「これをもつて見れば」と「も」を加えておく。
- (13) 写本には「あらずかせと」あり、「本のまま」と注がある。いずれにしても、この部分は意味がとりにくい。
- (14) 写本には「あへしきよう」とあり、「本のまま」と注がある。
- (15) 返点が打ってある。
- (16) 「道」を加えておく。

- (17) 「垣(かぎ)り」の略字かも知れない。
- (18) 「齡り」、写本には「はかは」と振り仮名がつけてある。
- (19) 写本には「ほしいまま」と振り仮名がつけてある。
- (20) 写本に「やけど」と振り仮名がある。
- (21) 写本に「入歯の字候か」と注がある。
- (22) 写本に「本のまま」と注がある。
- (23) 「並ぬる」は「立ぬる」かも知れない。
- (24) 「上逆する日など」と「な」を加えておいた。
- (25) 「加はらぬ日あり」、写本には横に「も」を加えて「日もあり」としている。
- (26) 「ましかとも」、写本には「本のまま」と注がある。
- (27) 「身貧にして」、別の読み方があるかも知れない。
- (28) 石原 明編「杉田玄白史料解題」には「本書は伝写本ただ一部のみで〈玉味噌〉と合綴され、慶応大学医学部図書館の富士川本中に存する」とある。日本医史学雑誌、第八巻、第三、四合併号(玄白一四〇年忌記念特集号)昭和三十三年一月。
- (29) 狂歌集に「置土産」がある。四方赤良(大田南畝)編「万載狂歌集」(天明三年、一七八三)には油煙齋の作として次の狂歌が載せられている。「祖父は山へしばしがほどに身は老いて、むかしむかしのはなし恋しき」「古今夷曲集・万載狂歌集・徳和歌後万載集」有朋堂文庫、第八九巻、有朋堂書店、大正七年一月、三五四頁。
- (30) 芳賀は「何にしても同じ浮世に」と読んでいる(文献4、三五八頁)。しかし、これは「百あても同じ浮世に」としか読めないように思う。真鍋広濟著「未刊近世上方狂歌集成」清光堂、昭和四四年一〇月、二六八頁によると「由縁斎置みやげ」には巻頭に弟の紀 海音の序があり、続いて「雲上に満月」の図の下に「立姿の貞柳像」があるとしている。それに賦した狂歌は次のようである。
- 「百あてもおなし浮世におなし華
月はまんまる雪ハ白妙」
- 玄白は、この「白妙」を「真白(まっしろ)」に直しているのである。